

研究課題

通常の学級における特別支援教育の充実

1 はじめに

特別支援教育とは、障害の有無にかかわらず、児童生徒一人一人の教育的ニーズを把握して、適切な指導や必要な支援を行っていくものである。通常の学級においては、特別支援教育の視点に立った児童生徒理解を基に、児童生徒が自己肯定感や自己有用感を味わえるような学級経営の充実に努めること。さらに、授業を中心とした学校生活のあらゆる場面で、児童生徒にとっての「安心感」と「わかりやすさ」を高める指導に取り組むことが重要である。

そこで、全ての児童生徒がわかる喜びや学ぶ意義を実感できる学級づくりや授業づくりについての具体的な取組を整理し紹介したいと考える。

2 研究内容

(1) ユニバーサルデザイン(UD)の視点を整理

①ユニバーサルデザインの考え方を教育に当てはめる。

ユニバーサルデザインとは、「全ての人にとって、できる限り利用可能であるようにデザインすること」とされている。これを教育に当てはめると、「全ての児童生徒にとってわかりやすく参加可能な授業づくり・学級づくりを行うこと」と考えられる。

②ユニバーサルデザインの視点を取り入れた学級づくり・授業づくりの観点を整理する。

※参考資料：山形県教育センター「UDの7つの視点一覧表」

学級づくり

1 教室環境	2 学習や生活のきまり	3 関係づくり
①教室の整理整頓の仕方の指導 ②座席の位置の配慮 ③視覚刺激の量への配慮(前面黒板とその周囲・壁面掲示物の精選) ④スケジュールの見やすい掲示 ⑤予定の変更を視覚的にわかりやすく伝える工夫	①学習活動のきまりの指導(聞くこと、話すこと、書くこと等) ②学級生活のきまりの指導(時間のきまり、清掃や給食等) ③実態の振り返りと必要に応じた見直し	①児童生徒の理解、児童生徒同士の関係把握の観察 ②児童生徒同士が関わり合える工夫 ③時・場・相手に応じたコミュニケーションの指導

授業づくり

4 授業の構成	5 教師の話し方・発問や指示	6 板書・ノートやファイル	7 教材・教具
①学習の流れ(見通し)の提示 ②学習用具の準備 ③動機づけを図る工夫 ④自力解決のための思考の手がかりの提示 ⑤学習活動の時間配分の工夫 ⑥学習の形態の工夫 ⑦集中力を高めたり気分を切り替えたりする活動	①肯定的な話し方 ②話し始める前に興味を引く工夫(タイミング、立ち位置、前置き) ③全体への発問や指示、個別の声かけや確認等の工夫 ④わかりやすい発問や指示	①授業の流れや内容がわかる板書の工夫 ②教室のどの位置からも見える文字の大きさ・行間の配慮 ③大事な点がわかる工夫(チョークの色・ラインや囲み・矢印や記号・掲示物の活用) ④視写しやすい板書の仕方(スピード・タイミング・間) ⑤ノートの書き方、ファイルの整理の仕方の指導	①視覚的支援を活用した教材・教具の工夫(具体物・写真・絵・動画・ICT機器等) ②材料・道具・用具の準備 ③読みやすく書きやすいプリントやワークシートの工夫 ④実態や特性に応じた教材の準備

(2) ユニバーサルデザイン(UD)の視点から学級づくり・授業づくりの具体例の提案

1—④ スケジュールの見やすい掲示

—スケジュール表と連動した忘れ物ゼロ作戦—

一日のスケジュールを掲示することで見通しをもつことができ、安心して学習に取り組めることはよく知られています。

そのスケジュール表と忘れ物ゼロ作戦を連動させて、さらに児童が安心して主体的に学習に取り組めるようにしたいと考えました。

忘れ物の原因の一つとして、各教科のセット物を理解していないことがあります。よく児童から聞く言葉として次のようなものがあります。

「社会の教科書、ノートは用意したのに…、資料集忘れた！」

「算数をもってきたはずなのに…、ドリルノート忘れちゃった！」などです。

そこで、一日のスケジュール表(教室掲示)の教科カード(写1)と、個人の時間割表(写2)、教科書やノート等の背表紙(写3)に、同色のシールを貼りました。さらに個人の時間割表のシールには数字が書いてあり、同色の数だけ集めれば自然に準備完了です。

一人でもしっかり準備ができるようにしました。



写1

赤(国語)シール



写2



写3

2—① 学習活動のきまりをわかりやすく定めた指導

何をどうしたらよいかわからない学習状況は、集中力や意欲を低下させ、児童に居心地の悪さや不安を感じさせます。「聞くこと」「話すこと」「書くこと」など学習活動のきまりを定め、わかりやすく伝えることで安心できる学級の状況をつくり出していきます。学級の実態に合わせ、端的な表記で掲示することで、学級全体が、必要なきまりを振り返りやすくなり、学習活動の質の向上を期待できます。

右の図は学習時の姿勢の確認に「ぺったん・ぴん・ゲー・チョキ・パー」の合図を使っている例です。「ぺったん」は足の裏を床につける、「ぴん」は背中をまっすぐにする、「ゲー」はお腹と机の間を拳一つ分空ける、「チョキ」は両手をじゃんけんのチョキで机を前から挟み身体を机と平行にする、「パー」は書くときの目の高さを机から広げた手のひら二つ分にする、ことを意味しています。子ども達には、一つ一つを言葉にするより伝わりやすく、子ども達同士でも声をかけ合い姿勢の確認をしています。



チョキ



パー



3-② 児童生徒同士が関わり合える工夫

一人一人が、自他のよさや苦手なことを知ったうえで関わり協力し合うことが、学級全体の居心地のよさにつながります。

児童が話し合って決めたクラスの目標のまわりに自分たちの顔と、言われて嬉しい「ふわふわことば」を貼り、教室前面に掲示しました。常時目にすることで、ふわふわことばを進んで使おうとする児童の姿が多くなっているように感じます。



友達のファインプレーにおくるグリーンカード。すごいね・ありがとう・嬉しい気持ちを伝えます。隣の席になった友達には、席替えまでに一枚は必ず渡すことになっています。渡す方ももらう方も嬉しそうです。

7-① 視覚的支援を活用した教材・教具の工夫

「様々な子どもたちがいる学級において、全ての児童・生徒が確実に分かるように情報を提示するには、音声などの聴覚的な教示だけでなく、視覚的な教示も合わせて取り入れることが大切である。(研究紀要 県連合教育会特別支援教育研究部会 H26)。」

つまり教師の言葉の指示だけでは、分かりにくいということです。写真1は、3年生から始まる「毛筆」の準備を、休み時間の内に自分たちでできるように作成(A3パウチ)したものです。学年当初は、黒板を見て確認しながら準備していた多くの児童も、回を重ねるうちに見ないで準備できるようになってきました。

最近では、視覚的支援の一つとして電子機器(タブレットPC)を活用することで、学習効果をあげている報告も多くあります(写2)。

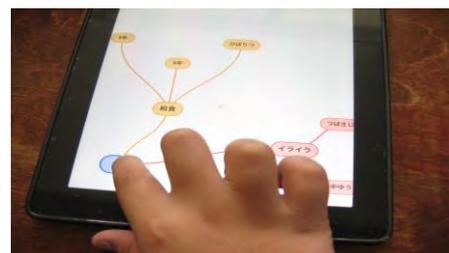
自分の考えをまとめて書く作文の課題では、図解で自分の考えを整理できるので順序だてて書くことができ、作文が書きやすくなります。

またイライラした時には、自分の気持ちを視覚的に整理して、振り返る手立てにもなります。

準備 休み時間に



写1



写2

4—⑥ ねらいに応じた様々な学習形態の工夫（中学校編）

ペア学習やグループ学習を行うことで、一斉授業よりも授業への参加意識を高めることができ、楽しんで取り組むことができます。また、コミュニケーションが苦手な生徒にとっては話題（課題）を提供することで、人と何かを成し遂げることを知ることができます。

ペア学習（写1・2）では、覚えたい内容の反復練習も、ペアになって行うことで単純作業ではなくなり、反復することへの抵抗をなくします。また、つまづいている箇所を教え合ったり、自分に不足しているところを補ってもらったりすることで、自己伸長を促します。

グループ学習（写3）では、ペア学習より高度な内容を提示しても、より多くのピアサポートをしてもらうことができます。その結果、さらに高度な学習内容の習得につなげることができています。また、一斉授業よりもさりげない疑問や質問が出やすく、グループで考えたり応え合ったりすることによって、学習の深みが出てきます。生徒から受ける生徒目線の答えは、時に受け取る側にとってもわかりやすいこともあります。

教科によって、グループ学習の目的は異なります。例えば、国語や社会の授業では、自分の意見を出し合い、話し合うことによって、思考力に深まりを持たせることができます。数学や理科の授業では、習得している生徒が周囲に解答への導き方を説明することで理論的な考えが発展します。一方、聞く側の生徒には、解答の導き方を理解することができます。さらに、英語や美術の授業では、他の生徒と話し合うことで、気づきを促したり表現を広げたりすることにもつながっていきます。

以上からも、教科および学習内容の目的に応じて学習形態を変えていくことは、学習内容を習得する上で効果的であることがわかります。



写1



写2



写3

6—③ 大事なところがわかるように工夫した板書(中学校編)

授業には、本時のねらいと授業の流れ、前時から本時、そして次時へのつながりが必要です。授業の流れを視覚的に表示する役割が板書であり、板書をノートに書き写すことで、生徒自身が授業内容のつながりをノートで確認できます。さらには自らの復習もできる役割が板書にはあります。

黒板は、全面が活用できるようにしてあります。そして、大体3～4分割のまとまりで書かれています。(写1・2)

文字の大きさでは、握りこぶしよりも大きな文字で書かれているため、とても見やすいです。(写2)

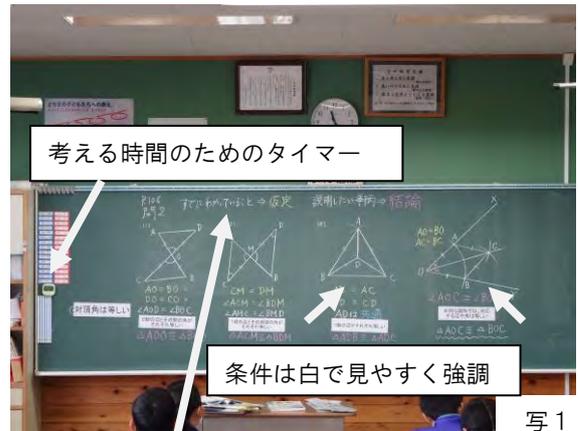
本時のねらいについて、各教科担任は毎時間必ず書くように共通理解しています。(写1・2・4)

話の流れが見える板書にするため、基本は左から右に流れるように書き(国語は右から左)、書く場所がいくつか分散しないよう心がけられています。

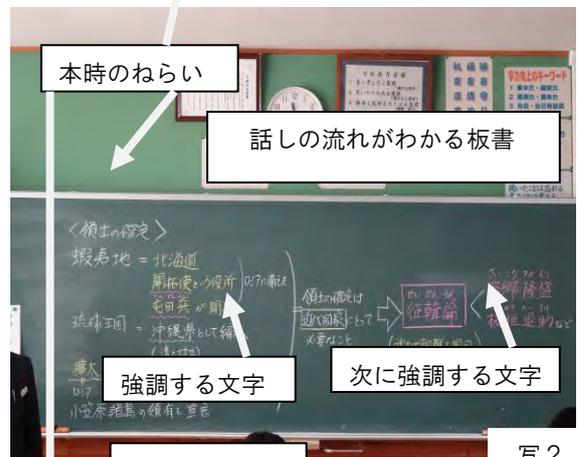
授業内容のポイントが明確に押さえられるよう、チョークの色にも配慮しています。重要事項は最も見やすい黄色のチョークを、次の重要事項は赤色のチョークを用いています。赤色では、蛍光チョークを使用した方がはっきりと見えやすいことがわかります。ただし、色覚異常の生徒がいる場合には、赤色チョークの使用は控えた方が望ましいです。使用する色については、4月の授業開始時に生徒へ知らせており、担当教諭と生徒との間で取り決めされています。青色や緑色のチョークは文字としての使用はせず、文字の囲み線やアンダーラインなど、見やすくするための補助線として用いています。

本時の授業活動の順序を板書している教科もあります。授業に見通しが持てることで、安心して授業に参加することができます。(写3)

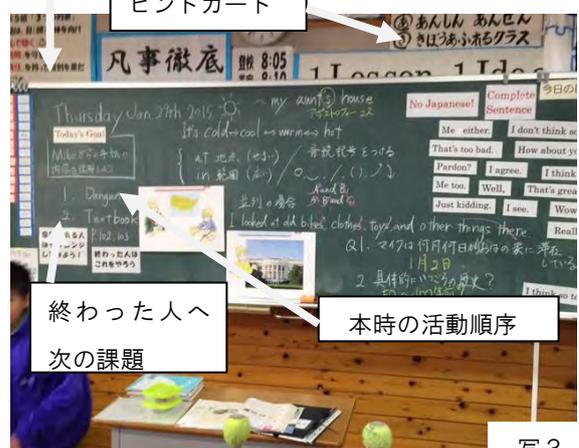
最後に、授業中の約束として、担当教諭が話しているときは話に集中する、担当教諭も板書を書き写す時間をきちんと与えるなどの配慮をし、一文一動作を心掛けています。(写4)



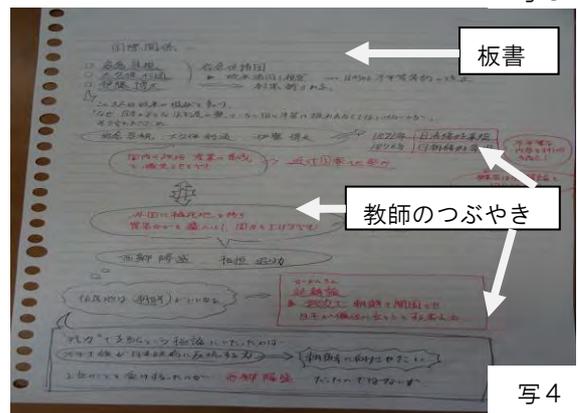
写1



写2



写3



写4